



事務局からのお知らせ



年会費の納入について

年会費口座自動引落の会員は、毎年4月27日(2025年は4月28日(月))にご指定の口座から自動引落となります。

口座引落の設定をされていない会員へ、4月7日正午時点の会員情報に基づき、4月25日頃、コンビニエンスストア払込用紙を郵送いたします。

●勤務施設にて個人会員の年会費をお支払いされる場合で請求書発行が必要な方、コンビニ支払い以外の金融機関からの振込(振込手数料はご負担となります)をご希望の場合は、詳細をメールにて事務局 office@jarm.or.jp までお知らせください。折り返し登録フォームをご案内いたします。

※2年間の会費未納の場合、会員資格が停止となりますのでご注意ください。

領収書発行について

2025年度会費から、会員専用ページにて領収書を発行できるようになります。会員専用ページ(右上の二次元コード)からログイン後、「会費お支払い状況」ページで発行できます。領収書の「宛名」は、通常は会員名で発行しますが、ご自身で法人名等に変更して発行できます。

発行可能な領収書は当年度分のみです。2年度を分納付された場合、前年度分はご自身で発行できませんので、ご希望の場合はoffice@jarm.or.jpまで、メールにてご依頼ください。

※「会員専用ページ」へログインの際、会員番号6桁(半角数字)およびパスワードが必要です。ご不明な場合は、「会員諸手続ページ」(右下の二次元コード)をご参照の上、該当する申請をお願いいたします。

※お電話での会員番号・パスワードの回答はいたしておりません。



会員専用ページ
ログイン二次元コード



会員諸手続ページ
アクセス二次元コード

登録情報について

ご自身の会員登録情報は最新情報になっていますか？

送付先の勤務先や自宅の住所に変更があった場合、登録情報に変更されていないと、本医学会からの大切なお知らせやご案内が届かない場合がございます。登録情報に変更があった場合には、お早めに情報を更新していただきますようお願いいたします。

登録情報は「会員専用ページ」(右上の二次元コード)へログインし、「個人情報の確認・変更」から確認・変更が可能です。

詳細は「会員諸手続ページ」(右下の二次元コード)をご確認ください。

海外勤務について

本医学会には休会制度がありません。海外へ留学・勤務等をされる場合は、下記(年会費納入)についてのご希望を事務局 office@jarm.or.jp までお知らせいただきますようお願いいたします。

- ・年会費を口座引落に設定したい。
- ・年会費を前払いで納めたい。
- ・一度退会して帰国後に再入会したい。(※資格をお持ちの場合は資格喪失となります。)

会員証について

入会いただいた方には会員カード(会員証)を郵送いたします。会員カードの表面には氏名、会員番号や二次元コードが記載してありますので大切に保管してください。なお、退会時には会員カードを返却していただきます。



日本リハビリテーション医学会ニュースNEXT!



リハビリテーション医学・医療の「今」がわかる情報マガジン

5号

2025.March

安保雅博理事長・副理事長メッセージ
第62回年次学術集会・第9回秋季学術集会ご案内
医学生セミナー・リハビリテーション科医になろうセミナー
若手海外研修特別補助・海外研修補助ご案内
第6回記者懇談会・第18回国際リハビリテーション医学会
リハビリテーション科医からのメッセージ



公益社団法人

日本リハビリテーション医学会



第62回年次学術集会について説明する
三上晴夫会長



慶應義塾大学病院リハビリテーション科



第8回秋季学術集会は
岡山にて開催しました



三重大学医学部附属病院リハビリテーション科

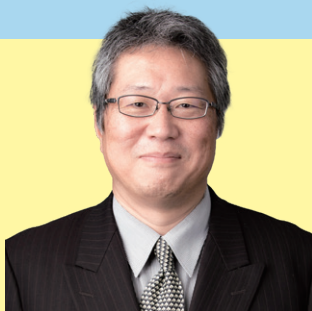


第61回年次学術集会は浜谷で開催しました



第9回秋季学術集會を開催する旭川の旭山動物園





理事長ご挨拶

公益社団法人 日本リハビリテーション医学会 理事長
東京慈恵会医科大学 リハビリテーション医学講座 主任教授

安保 雅博

地域医療や健康長寿社会の実現に向けて 共にリハビリテーション医療の 未来を切り拓きましょう。

会員の皆様、新年度を迎えるにあたり、理事長として一言ご挨拶申し上げます。リハビリテーション医療を取り巻く環境は、社会構造や人口構成の変化に伴い、年々大きく変貌を遂げています。1963年に日本リハビリテーション医学会が創立された当時、会員数は494名でしたが、2024年には11,478名と約23倍に増加しました。この成長は、リハビリテーション医療の重要性が広く認識されてきた証といえます。

しかしながら、2025年には団塊の世代が全員後期高齢者となり、2030年には認知症患者数は675万人から744万人に増加すると予測されています。また、単身高齢者世帯も増加し、障害者の高齢化や要介護認定率の上昇により、医療と介護の複合的なニーズが一層高まることが見込まれています。さらに、救急搬送や在宅医療の需要も増加し、リハビリテーション医療の守備範囲は予防から治療、機能維持に至るまでますます広がっています。

こうした状況の中で、リハビリテーション科専門医の役割はさらに重要性を増しています。特に、チーム医療においてリハビリテーション科専門医は、患者の病態や生活環境を総合的に評価し、多職種と連携して最適な治療計画を立案・実行する中心的な存在です。急性期医療から回復期、さらには生活期の地域包括ケアシステ

ムに至るまで、専門医の知識と技能が求められる場面は多岐にわたります。これに対応するため、専門医の養成や教育機関でのリハビリテーション医学講座のさらなる充実が必要です。

また、リハビリテーション医療の質と量の抜本的な変革も求められています。臓器別リハビリテーションの意義や、20分1単位の診療報酬基準の見直し、職場復帰を目指すリハビリテーション治療の医療保険制度の在り方など、議論すべき課題は山積しています。さらに、地域包括ケアシステムを有効に機能させるためには、多職種との対話・協調を通じて新たな課題を解決する力と柔軟性を持つ人材の育成が不可欠です。

本医学会としては、リハビリテーション科専門医の有用性や重要性を社会に広く啓発するとともに、地域医療や健康長寿社会の実現に貢献する医療人の養成に力を注いでまいります。医学会運営においても、常に改善と進化を目指し、会員の皆様とともにリハビリテーション医療の未来を切り拓いていきたいと考えています。

2025年度も引き続き、皆様のご協力とご支援を賜りますようお願い申し上げます。ともに新たな課題に立ち向かい、リハビリテーション医療のさらなる発展を目指してまいります。

本医学会公式X(旧Twitter)です。皆様、是非フォロー、リポストください。



広報委員会 X

会員のみなさまへ医学会の活動、プロジェクト、イベントなどの最新情報を配信しております。



Progress in Rehabilitation Medicine (国際誌) X

国際誌(PRM)に掲載された論文について多くの方に知って頂くために、雑誌に掲載された新規論文に関する情報や、雑誌運営統計、Reviewer Award、論文賞、仕様変更などに関する情報を配信しております。



副理事長のご挨拶



藤田医科大学 教授

大高 洋平

社会構造の変化のなかで、リハビリテーション医学の役割と需要は拡大しております。その中で、本医学会が中核となり確かな活動を行うことが今まで以上に求められていると認識しております。委員会活動としては、国際委員会、国内誌編集委員会、国際誌編集委員会、試験委員会、専門医制度委員会および関連専

門職委員会を統括させて頂いております。国際化、学術活動の発信、専門医育成と質の担保、さらにはリハビリテーション関連職・諸団体との連携、といずれも大変重要なものがございます。今後も会員の先生のご指導を賜りながらさまざまな課題に真摯に向き合い、より良い未来の構築に邁進する所存です。



大阪医科薬科大学 教授

佐浦 隆一

副理事長(総務・広報担当)を拝命し、理事長直轄の将来構想委員会と広報委員会、評価・用語委員会に加え、倫理・利益相反・危機管理といった渉外を担当する委員会を統括しております。2024年度は、役員任期制や代議員定年制が導入されました。創立60周年(還暦)を迎え、若い力が牽引して新たな一步を踏み出し、さらなる発展を遂げる年となるよう

努めてまいります。医学・医療のインフラストラクチャーであるリハビリテーション医学が、2025年問題に続く2040年問題に対しても揺るぎない強靱さ(レジリエンス)を築いていくために、ICFの理念に沿った皆様の「活動」と「参加」の推進にご協力をお願い申し上げます。



弘前大学 教授

津田 英一

本医学会の委員会活動では、先端医療・機器委員会、男女共同参画委員会、顕彰制度委員会および社会保険委員会の統括副理事長、学術集会検討委員会の担当理事・委員長を拝命しております。各委員会では、先端技術のリハビリテーション医学・医療への応用、ジェンダー平等の推進、本医学会各賞候補者の選考、リハビリテーション医学・医療関連の社

会保険制度(診療報酬・介護報酬等)への提言・答申、年次学術集会・秋季学術集会開催に向けたサポートを主な業務として行っております。いずれの委員会におきましても、これまでの伝統を継承しつつ、社会の変化にも柔軟に対応し、未来志向で新たな挑戦に取り組んでまいります。



横浜市立大学 教授

中村 健

臓器別医療の発展と高齢化の加速により、リハビリテーション医療が対応する疾患・病態・障害の重篤化と複雑化が急速に進んでいます。リハビリテーション科医は、この重篤化し複雑化した疾患・病態・障害に対応し患者さんのADLとQOLの向上を果たすため、全身管理を含めた高いレベルの知識と技術が求められるようになっていきます。このため、リハビ

リテーション科専門医教育の充実化は重要な課題です。私は、2016年より理事を務めさせていただき、主に教育活動に関係する委員会の担当理事として活動をしてまいりました。今後も、需要と役割が拡大するリハビリテーション医学・医療の将来を担う医師の育成と教育活動に副理事長として尽力してまいります。



獨協医科大学 教授

美津島 隆

財務及び会則検討などの統括理事として活動しています。

財務に関しては、コロナ禍の影響で医学会の資産が大幅に目減りしましたが、2024年度は、学術集会の成功、国内誌のオンライン化の効果、研修会参加者数の増加により、黒字決算が期待できそうです。来年度にはコロナ禍前の財務内容にもっていき、以降は社会情勢に配慮しながら、安定した財務運営を目指したい

と考えています。

会則に関しては、時勢にあった見直しが必要なので、定款をはじめ規則などの整備を行っており、適宜事務局、顧問弁護士と相談し、会則検討委員会に諮って、加筆修正を行っております。

今後も引き続き財務、会則を通して医学会の健全化に努めていく所存です。

学術集会のご案内・お礼

2025年に開催する学術集会のご案内と、
2024年に開催した学術集会の会長からお礼のメッセージが届きました。



第62回日本リハビリテーション
医学会学術集会
会長
三上 靖夫
京都府立医科大学大学院
リハビリテーション医学 教授

2025 **6.12** Thu ▶ **14** Sat

第62回日本リハビリテーション医学会年次学術集会

第62回日本リハビリテーション医学会学術集会は、2025年6月12日～14日に国立京都国際会館で開催されます。本学術集会では、柔道の創始者・嘉納治五郎先生の理念「精力善用・自他共栄」をテーマに掲げ、研究・臨床に通じるその精神を学び、共有する機会を提供します。

基調講演には、嘉納先生の理念を校是とする灘中・高等学校元校長・和田孫博先生をお招きし、会長講演でもその意義に触れる予定です。特別講演には、「京都人の教育観」（井上章一氏）、「睡眠の謎」（柳沢正史氏）、「難病治療法開発の歩み」（和泉唯信氏）など、幅広い分野の専門家を招聘し、さらに、ジェンダー平等やAI・VRを活用した医療革新に関する講演も予定しています。

特別企画では、言語障害と治療の本質に迫る「言葉っ

て何だろう?」、リハビリテーション医学・医療と地域共生を探る「私たちはどこまで地域に迫れるか」、AIやメタバースを活用した医療の未来を考える「先進技術とリハビリテーション医療」など、革新的なセッションが展開されます。また、全国から集まったアイデアを競う「アイデア善用コンテスト」や、指導医抜きで専攻医同士が交流できる「専攻医交流会」など、実践的な学びの場も設けられています。

さらに、全員懇親会のオープニングアクトとして、同志社大学応援団のパフォーマンスや、名物「壹銭洋食」の特別出店も予定し、学術的な議論だけでなく、楽しみながら交流できる機会も充実させました。皆様のご参加を心よりお待ちしております！

2025 **10.23** Thu ▶ **25** Sat **第9回日本リハビリテーション医学会
秋季学術集会**



第9回日本リハビリテーション
医学会秋季学術集会
会長
大田 哲生
旭川医科大学病院
リハビリテーション科

第9回日本リハビリテーション医学会秋季学術集会は、2025年10月に旭川で開催されます。「リハビリテーション医学の明日に向かって」をテーマに、多職種が団結し、医療の未来をともに創造する場にしたいと思います。学術的議論はもちろん、旭山動物園での懇親会も企画し、交流の機会も充実しています。リハビリテーション医療の発展に貢献する貴重な機会を、ぜひ一緒に！



Thank you **2024年度開催のお礼**



第61回日本リハビリテーション
医学会年次学術集会

会長 **安保 雅博**
東京慈恵会医科大学
リハビリテーション医学講座 主任教授

第61回日本リハビリテーション医学会学術集会は、6月13日～16日に渋谷で開催され、5,000人以上が登録し、4,000人以上が現地参加しました。多数の講演やシンポジウムを含むオンデマンド配信も7月1日～31日に実施しました。皆様のご協力で感謝申し上げます。



第8回日本リハビリテーション
医学会秋季学術集会

会長 **花山 耕三**
川崎医科大学
リハビリテーション医学 教授

第8回日本リハビリテーション医学会秋季学術集会は、現地開催およびオンデマンド配信を無事終了いたしました。多くの皆様のご参加とご支援に心より感謝申し上げます。本学術集会がリハビリテーション医学の発展と交流の場となったことを嬉しく思います。誠にありがとうございました。



第9回 日本リハビリテーション医学会 秋季学術集会

リハビリテーション医学の明日に向かって
～Let's unite toward our dreams～



開催形式 現地開催+オンデマンド配信

公開 **2025年10月23日(木)～25日(土)**
会場 **旭川市民文化会館・アートホテル旭川**
会長 **大田 哲生** 旭川医科大学病院 リハビリテーション科 教授

国内誌オンラインジャーナル

国内誌「The Japanese Journal of Rehabilitation Medicine」は2024年1月号より完全オンラインジャーナルになりました。毎月18日(土・日・祝の場合は18日以前の平日)に発行し会員専用ページ内『国内誌オンラインジャーナル』で公開しております。また、JARM NEWSは本医学会 HP に、バックナンバーはJ-STAGEに掲載しております。

会員専用ページ
(正会員、名誉会員、功労会員、専門職会員専用)

Vol.53～最新号がご覧いただけます。
※会員限定（ログイン必須）



J-STAGE
(賛助会員、正会員、名誉会員、功労会員、専門職会員専用)

Vol.1～ご覧いただけます。
※最新号は発行から2～3か月後に反映されます。
※発行後1年以内は会員限定（サインイン必須）



JARM NEWS

Vol.61 No.7～の JARM NEWS
をご覧いただけます。



医学生セミナー・リハビリテーション科医になろう セミナーご案内



本医学会では、医学生やリハビリテーション科医に興味を持つ医師のために様々なセミナーや研修制度を設けています。オンラインで視聴できるものから病院での実践的な研修までありますので是非ご参加ください。



2025年医学生セミナーについて

本医学会では、研修施設に協力を依頼し、医学生を対象としてリハビリテーション医学を学ぶための医学生セミナーを全国で開催しています。是非ご参加ください。受講者の感想文もご覧いただけます。



Web セミナー

2024年度「リハビリテーション科医になろうセミナー」Web 視聴セミナー

2024年度にWeb上で開催した「リハビリテーション科医になろうセミナー」の収録講演が視聴可能です。ご希望の方は二次元コードからのアクセス後に青色のお申込ボタンからお申込みください。



第1回 (2024年7月28日開催収録分)

- 「リハビリテーション医学の展望と医師の役割」
弘前大学大学院医学研究科リハビリテーション医学講座 津田 英一先生
- 「リハビリテーション科ただいま研修中！」
J A厚生連遠州病院リハビリテーション科 山本 麻里奈先生
筑波大学附属病院リハビリテーション科 竹原 慧先生
- 「受講者へのお知らせ」
京都府立医科大学大学院医学研究科リハビリテーション医学講座 垣田 真里先生
- 「リハビリテーション科専門医が語る面白さ」
帝京大学医学部附属病院リハビリテーション科 西牧 孝晃先生
六甲アイランド甲南病院リハビリテーション科 松本 健先生

第2回 (2024年8月18日開催収録分)

- 「リハビリテーション医学の展望と医師の役割」
京都府立医科大学大学院リハビリテーション医学 三上 靖夫先生
- 「リハビリテーション科ただいま研修中！」
広島大学リハビリテーション科 椿田 悠馬先生
北海道大学病院リハビリテーション科 藤寄 瑠子先生
- 「受講者へのお知らせ」
宮城厚生協会総合病院リハビリテーション科 藤原 大先生
- 「リハビリテーション科専門医が語る面白さ」
横浜市健康福祉局障害者更生相談所 栗林 環先生（教育委員会）
東京湾岸リハビリテーション病院リハビリテーション科 伊藤 真梨先生（教育委員会）

第3回 (2025年3月23日開催収録分：近日中に公開予定)

- 「リハビリテーション医学の展望と医師の役割」
横浜市立大学医学部リハビリテーション科学 中村 健先生
- 「リハビリテーション科ただいま研修中！」
津軽保健生活協同組合 健生病院 リハビリテーション科 田村 一平先生
京都府立医科大学附属病院リハビリテーション科 梶 健太郎先生
- 「受講者へのお知らせ」
六甲アイランド甲南病院リハビリテーション科 松本 健先生
- 「リハビリテーション科専門医が語る面白さ」
ちゅうざん病院リハビリテーション科 仲地 聡先生
山口大学医学部附属病院リハビリテーション部 油形 公則先生

電子研修手帳の紹介

専攻医の研修記録の管理や評価をより効率的に行うため、従来の紙の研修手帳に代わり、電子研修手帳を導入いたしました。専攻医や指導医の先生方は、会員専用ページにログイン後、右側の「研修手帳」ボタンをクリックするとアクセスできます。各種記録の確認や入力が簡単に行えます。

- 画面上で「勤務歴登録」など必要な情報を入力してください。
- 詳細な操作方法は、下記のマニュアルおよびFAQをご参照ください：

- ◆マニュアル： <https://www.jarm.or.jp/document/denshikenshutecho-mannual.pdf>
- ◆FAQ： <https://tayori.com/q/denshikenshutecho/>



マニュアル
二次元コード



FAQ
二次元コード



※不明な点がございましたら、
denshikenshutecho@jarm.
or.jp
までお問い合わせください。

使い方

2024年医学生セミナー感想文 ●三重大学医学部附属病院



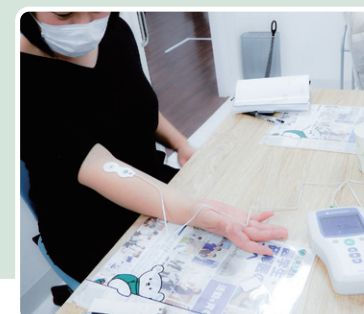
医学部2年生

三重大学医学部附属病院のリハビリテーション科のセミナーに参加させていただきました。リハビリテーション科についての説明を受けた後、理学療法士の方が患者さんとともにリハビリテーション治療をする様子を見学させていただいたり、実際に体験させていただいたりしました。特に、初めて嚥下内視鏡を持たせていただいたことや、高次脳機能検査の体験が印象に残っています。また、嚥下機能が低下した患者さんに使用される「とろみ水」はデキストリンや増粘多糖類でできていることを初めて知り、実際に試飲してみるとあまり美味しいとは言えませんでした。そのため、先生はできる限り薄めて使用したりと工夫しているそうです。これは教科書では学ぶことのできないことだと感じました。リハビリテーションスタッフが不足しているというお話も聴き、より一層勉学に励み、医学知識をさらに知りたいと強く感じることでした1日でした。百崎先生には低学年の私にも理解できるように丁寧に説明していただき、ありがとうございました。今後ともよろしく願っています。



医学部3年生

三重大学医学部附属病院のリハビリテーション科を見学させていただきました。まず最初に関心したリハビリテーション医療とは何を目的としてどのようなことを行うのか、リハビリテーション医療に関わるさまざまな職種といっ



感想

た全体的なことを説明していただいた後、リハビリテーション室の見学、杖の使用やリハビリテーション治療の体験、とろみ水の試飲、電気刺激療法や認知機能検査の体験を行いました。特に電気刺激療法の体験が印象的で、教科書からの伝聞でしかなかった大脳皮質運動野と実際の運動の関係が、実感を持って理解できました。また、先生のお話では嚥下障害にも様々な原因があり、有効な対処が異なるため、丁寧に評価をしていく必要があること、時に歯科領域の評価も必要があることが意外に印象に残っています。今回のセミナーで、リハビリテーション科は日常生活と密着した科であることが感じられ、将来の選択肢の一つとして具体的にイメージできるようになりました。貴重な機会をいただき、ありがとうございました。



医学部4年生

この度、三重大学医学部附属病院のリハビリテーション科で見学・体験させていただきました。セミナーでは教授の百崎先生よりリハビリテーション医療の基本的な知識やリハビリテーション科医の働き方、VRや3Dスキャンといった最新の技術などについてご説明していただきつつ、実際の嚥下機能評価の現場にも参加させていただきました。これらの経験を通して、リハビリテーション医療やリハビリテーション科医の仕事についての理解が大変深まりました。また、嚥下機能評価に用いられるとろみ付き飲料やゼリー、脳卒中後の上肢麻痺に対する経頭蓋磁気刺激療法も体験させていただきました。特に、経頭蓋磁気刺激療法の機器により自らの手が動いた体験は非常に印象的で、リハビリテーション医療の可能性の大きさや技術の進歩を強く感じました。今回のセミナーを通じてリハビリテーション医療の重要性や有効性を再認識し、リハビリテーション医学に対する関心がさらに強いものとなりました。今回の貴重な経験が無駄になることのないよう、今後も学び続けていきたいと考えております。そして、将来的にはリハビリテーション医療に少しでも貢献することができれば幸いです。この度は誠にありがとうございました。





海外研修補助・若手海外研修 特別補助のご案内

本医学会では、会員の国際学会などでの活躍を促進するために、「海外研修」と「若手海外研修」について2つの補助制度を設けています。特に若手会員（40歳以下）の国際的な活躍をサポートすることを目的とした特別補助は、2025年度より補助対象地域を「アジア・オセアニア地域」から拡大し、「海外」として地域を限定しないことになりました。

若手海外研修特別補助

補助対象	海外で開催されるリハビリテーション医学関連学術集会で筆頭著者としての発表を予定している本医学会正会員
補助額	最大 30 万円（渡航先地域による）
応募資格	1) 応募締め切り日において年齢が 40 歳以下の本医学会正会員であること 2) 本医学会在籍 3 年以上のこと 3) 同年度海外研修補助制度との併願はできない 4) 過去に海外研修補助を受けていないこと
対象者数	1 人



海外研修補助

補助対象	海外で開催されるリハビリテーション医学関連学術集会での発表もしくは海外のリハビリテーション医学関連施設への訪問・業績発表を予定している医学会正会員
補助額	最大 30 万円（渡航先地域、内容による）
応募資格	1) 応募締め切り日において年齢が 45 歳以下の本医学会正会員であること 41 歳以上の会員は施設への訪問を行うこと。 2) 本医学会在籍 3 年以上のこと 3) 本医学会国際誌 (Progress in Rehabilitation Medicine) または海外の学術雑誌に First Author としてリハビリテーション医学に関する原著論文が 1 編以上掲載されているか、若しくは海外のリハビリテーション医学関連の学術集会あるいは国内外で開催された国際学術集会において外国語での発表の経験が 1 回以上あること 4) 過去に本海外研修補助を受けていないこと（特別補助を除く）
対象者数	1 人
備考	学会参加に対する補助の内訳 1) 現地での学会参加の場合：学会参加費＋旅費（補助金額の範囲内で相当する額） 2) Web での学会参加の場合：学会参加費のみ ＊ただし 2) の Web での学会参加の場合のみ、翌年度以降の本海外研修補助に一回に限って申請することができる。



第18回国際リハビリテーション医学会レポート (ISPRM2024)

第 18 回 ISPRM (国際リハビリテーション医学会) が、2024 年 6 月 1 日～ 6 日、シドニー（オーストラリア）で開催されました。この国際学会に参加された藤田医科大学医学部リハビリテーション医学講座の柴田斉子准教授にお話をうかがいました。

Q. 第 18 回 ISPRM (国際リハビリテーション医学会) に参加した目的

柴田先生：自身のポスター発表と、初めて国際学会で口演発表する後輩の支援、各国で取り組んでいる最新のリハビリテーション医療に関する情報収集を行う目的で参加しました。

Q. 会場と街の様子



ダーリング・ハーバーから見た学会場

柴田先生：シドニーは冬の始まりで朝方は気温が低く、寒いと感じることもありましたが、日中は過ごしやすい気温でした。学会場が面しているダーリング・ハーバーでは、この時期の特別企画として夜間のライトアップが行われ、夜まで多くの人々が訪れ賑わいをみせていました。治安も悪くなく、近くのタウンホールにあるショッピングセンターまで歩いて行くこともできました。学会場はとても広く綺麗で、映像や音響システムが整っており聴講に集中することができました。

Q. 聴講 (参加) したセッションとその感想

柴田先生：国際的な交換留学に関するセッションに参加しました。韓国のソウル大学にも数カ月の留学から Ph.D. (博士号) を取るためのコースまでが準備されており、フィリピン、マレーシア、ベトナム、インドネシアなどのアジア圏域や、ニカラグアやモロッコからの留学生を毎年数多く受け入れているとのことでした。現地の言葉

を理解し、患者とのコミュニケーションをはかることができれば、より多くの経験を積むことができたに違いなく、



レセプションパーティーの様子

言語を勉強してまた訪れたい、と話す留学生の言葉が印象的でした。私の所属施設でも毎年海外から多くの見学者、留学生を受け入れており、英語でのコミュニケーション能力を高め、よい体験を通してお互いの国のリハビリテーション医療を理解し、高めていけるよう努力したいと思いました。

Q. 一緒に参加した日本人の先生方

柴田先生：北海道大学の向野雅彦教授と兵庫医科大学の内山侑紀准教授が参加されていました。内山先生は優秀ポスターを発表され、向野先生はパネルディスカッションなどで忙しくされていました。広島大学およびその関連施設からはポスター 7 演題を提出して、7 名参加し、3 演題が優秀演題に選ばれました。

Q. 若手の活躍

柴田先生：初めて国際学会で発表した後輩は、緊張していましたが立派に発表を終え、同じセッションの演者や座長と交流することができ、よい経験になったようです。中国や台湾からも若手の発表が多く、積極的にチャレンジし、ステップアップしていくことが大切であると心に刻んでいました。

Q. ISPRM2024 で印象に残ったこと

柴田先生：症例報告、観察研究、臨床研究などさまざまな発表がありました。人口や年齢分布など各国の特徴が色濃く反映されており、興味深く聴講しました。オセアニアからは主催国のオーストラリア、隣国のニュージーランド、アジアからはインドネシア、中国、韓国、台湾からの発表が多く、勢いを感じました。引き続き日本からも多くの人が学会に参加し発表を行い、世界との活な交流を継続していくことの重要性を感じ、帰国の途につきました。



初めての国際学会での発表

若手リハビリテーション科医からのメッセージ

医療現場の第一線で活躍中の若手リハビリテーション科医の
仕事の様子や医学生・専門医を目指す方へのメッセージをご紹介します。

Message

30代・女性 勤務医 専門医

リハビリテーション科医は、単なる治療ではなく、患者さんの新たな人生設計を共に考えるやりがいのある仕事です。整形外科から転向し、専門医取得の過程で多分野の知識を学ぶことで診療の幅が広がりました。患者さんが一歩ずつ回復し前進する姿は、大きな喜びと達成感を与えてくれます。リハビリテーション医学は幅広く、自分の興味に応じて深く学べる魅力があります。あなたに合う分野がきっと見つかります！

20代・男性 勤務医 専門医未取得

リハビリテーション科は、相談しやすい環境の中で、上司や療法士と連携しながら学べる魅力的な分野です。検査手技の指導も熱心で、専門知識や技術を集中的に学ぶ絶好の機会となります。疼痛へのアプローチやリハビリテーション治療を拒否する患者さんの特徴を研究しながら、実践的な臨床力を高めることができます。今後の成長を目指し、共に学び、より良いリハビリテーション医療を提供していきましょう！

30代・女性 勤務医 専門医

脳神経内科では、脳血管疾患や変性疾患、筋疾患によるADL低下が避けられません。患者様の生活をより良く支えるためには、リハビリテーション医学・医療の知識が不可欠です。リハビリテーション医療による入院や通院を通じ、「できることが増えた」と患者様が実感される瞬間は、大きなやりがいとなります。生活期を見据えた支援が可能になり、働き方の選択肢も広がるこの分野は、今後さらに需要が高まる魅力的な領域です。

20代・男性 専門医未取得

リハビリテーション科は、教育熱心で温かい環境の中で基礎から学び、臨床経験を積みながら成長できる分野です。脊髄損傷の再生医療など最先端の研究にも関わる機会があり、学会発表や臨床研究にも挑戦できます。専門医取得を通じて、幅広いリハビリテーション医療の知識が身につく、どの病院でも求められる貴重な存在になれます。リハビリテーション科医の需要は高まっています。ぜひこの分野に挑戦してみませんか？

30代・勤務医 専門医

リハビリテーション科では、急性期から生活期まで幅広く医療に関わり、患者様の中長期的な回復と生活の質向上を支援できます。医師とセラピストの連携が良好で、専門医として知識と技術を深めながら成長できる環境です。高齢化が進む中、リハビリテーション科専門医の需要はますます高まっています。自分のやりがいや楽しみを見つけられる魅力的な分野で、一緒に未来のリハビリテーション医療を支えていきましょう！

30代・女性 医員 専門医

リハビリテーション科では、新患リハビリテーション処方や嚥下検査、ボツリヌス治療、装具診察など、多岐にわたる診療を行い、患者の機能回復を支援します。勉強熱心な療法士と連携し、他科では見落とされがちな部分にも目を向けることができる点が魅力です。病気の診断や手術だけでなく、患者自身の能力を伸ばし、より良い生活へ導くサポートができることに大きなやりがいを感じられます。患者と長く寄り添い、他職種と協力しながら支援できるこの分野で、ぜひ新たな一歩を踏み出してみませんか？

30代・男性 勤務医 専門医

急性期病院におけるリハビリテーション科は、ICUの多職種回診やリハビリテーション処方、痙縮外来、CPX検査など幅広い業務を担当し、チーム医療の一翼を担います。風通しの良い職場環境で、療法士との連携もスムーズに行えます。サルコペニアやフレイルといった高齢者医療の課題にも対応しながら、臨床と研究のバランスをとりつつ知識を深められる環境です。専門医資格は必須ではないものの、研修を通じてリハビリテーション科医としての基礎知識を確実に習得できる点は大きなメリットです。リハビリテーション医療に興味がある方は、ぜひ挑戦してみてください！

30代・男性 勤務医 専門医

リハビリテーション科は、病棟・外来診療、装具・車椅子診察、ボツリヌス治療、嚥下検査など多岐にわたる業務を担当し、患者の生活を支える重要な役割を担います。療法士との連携が強く、他科の医師とも距離が近いので、日々のディスカッションを通じて幅広い知識を深められます。後期研修では、急性期から回復期まで体系的に学ぶことができ、専門医を取得することでリハビリテーション医学の複雑な課題に対応する力が身につきます。リハビリテーション科医は患者、家族、在宅ケアチームなど多職種と連携し、チーム医療を通じて生活の質を向上させることにやりがいを感じられる仕事です。進路に迷っている方は、ぜひ病院見学をおすすめします。リハビリテーション医学の奥深さと、患者の回復に寄り添う医療の魅力を実際に体験してみてください！

第6回オンライン記者懇談会を開催



2025年3月11日17時から、日本リハビリテーション医学会は「感染症パンデミック時に必要なリハビリテーション医学・医療とは？新型コロナウイルス感染症の経験から」をテーマに、第6回オンライン記者懇談会を開催しました。

本会では、新型コロナウイルス感染症（COVID-19）のパンデミックから5年を経た現在、リハビリテーション医学がどのように対応してきたか、今後の感染症対策への貢献について4人の先生方が記者に向けて発表しました。

冒頭では、理事長の安保雅博先生が、リハビリテーション医学は、単なる機能回復ではなく「活動を育む医学」として進化していることや、高齢化や障害者支援の課題が深まる中、早期リハビリテーション治療の重要性について説明しました。さらに、運動継続の意義やD&Iの視点も強調され、その一環として、2025年7月に北海道で障がい者ゴルフ大会が実施される予定で、障がい者がプレーする様子を紹介しました。続いて、国立国際医療研究センター病院の藤谷順子先生が、COVID-19感染対策指針の策定とその後の展開について説明し、今もなおwith コロナの状態です。インフルエンザなども含めて多くの感染患者の対応を続けている医療現場の状況と、リハビリテーション治療の重要性について紹介しました。

さらに、東京科学大学病院の酒井朋子先生が、コロナ禍におけるリハビリテーション医療の実情を報告し、最後に聖マリアンナ医科大学病院の佐々木信幸先生が、COVID-19後遺症外来の開設から現在に至るまでの経緯、Long COVIDに対する経頭蓋磁気刺激の治療成績などについて発表しました。

本懇談会は、感染症領域を超えたリハビリテーション医学の重要性を広く伝える貴重な機会となりました。

記者懇談会の開催概要

- 日時
2025年3月11日（火）
17:00～18:00（16:45 受付開始）
- 開催方法
Zoomによるオンライン開催
- テーマと説明者
（司会・挨拶）
公益社団法人日本リハビリテーション医学会 理事・広報委員会委員長
東京科学大学病院リハビリテーション科 科長 酒井 朋子
- 1. 「日本リハビリテーション医学会の平素の取り組み（健康寿命延伸とD & I社会における取組）の中でのコロナ禍」（15分）
（説明者）
公益社団法人日本リハビリテーション医学会 理事長
東京慈恵会医科大学リハビリテーション医学講座 主任教授 安保 雅博
- 2. 「感染対策指針（COVID-19）のとりまとめとその後」（15分）
（説明者）
国立国際医療研究センター病院リハビリテーション科 診療科長 藤谷 順子
- 3. 「コロナ禍のリハビリテーション医療場面とその実情、医学会の取り組み」（10分）
（説明者）
東京科学大学病院リハビリテーション科 科長 酒井 朋子
- 4. 「新型コロナウイルス感染症（COVID-19）後外来～Long COVIDと経頭蓋磁気刺激」（10分）
（説明者）
聖マリアンナ医科大学病院リハビリテーション科 主任教授（診療部長） 佐々木 信幸

